

蘇明仙著『大江健三郎論：〈神話形成〉の文学世界 と歴史認識』

中野，和典
筑紫女学園中学・高等学校教諭

<https://doi.org/10.15017/8502>

出版情報：九大日文．7，pp.124-125，2006-04-30．九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

◎ 書評

蘇明仙著 『大江健三郎論——〈神

話形成〉の文学世界と歴史認識——』

NAKANO
中野 和典

統合と連合とは、言語を分析的にとらえる最も基本的な視点だと言えるだろう。「私はリンゴが好きだ」と言うとき、「リンゴが私は好きだ」と言うのか、「リンゴが好きだ私は」と言うのか、つまり、言語の線的特質に注目してその序列において言葉の関係を見るのが統合の視点であり、「私はミカンが好きだ」、「私はレモンが好きだ」等、つまり、同位の言葉の中からどれを選ぶのかに注目して、その同位配列において言葉の関係を見るのが連合の視点である。ソシユールの指摘するとおり、この視点は、単に語に対してだけでなく、あらゆる種類の複合単位（合成語から全文まで）に対して適用できる（『一般言語学講義』。〈歴史〉を一つのテキストと見なし、統合と連合の視点を拡大的に援用すれば、ある時代の出来事の中から、どのような出来事を選択し、記述するのかということは連合の問題に関わり、選び出した出来事をどのように接続し、どのような文脈において語ることかというところは統合の問題に関ると言えるだろう。

このようなことを念頭に置くと、蘇明仙著『大江健三郎論

——〈神話形成の文学世界と歴史認識——〉の提示する問いは、刺激的である。

今日のブルジョワジーが彼らの価値観・世界観を押しつけるものとして作用する神話、それに対する「最良の武器は、多分、今度は神話を神話化することであり、人工的神話をつくりだすことである」というバルトの発言は、この意味で示唆深い。もし今日の文学テキストが何かに対して人工的に神話を作っているとするなら、その対称は何であり、〈神話形成〉はどのような意図によるものであるか。また文学作品が創出する人工的神話が現実社会に大きな形成力・喚起力を呼び起こし、表象的な力を発揮してくるなら、バルトの「神話作用」的視点から大江の作品を読んでみる必要もあるだろう。

繰返しになるが、私は六〇年代後半から著しく作品世界に神話的ヴィジョンを持ち込もうとしている大江文学に注目する。大江は〈神話形成〉を通して日本・日本人モデル、世界モデル、宇宙モデルをつくり出してきた。それは過去（歴史）の総体を鳥瞰し、実現されなかつた可能性含みの出来事から、新たな可能性を発見しようとする大江の歴史認識の一方法とも言えよう。

今日の文学においてなぜ神話なのか。大江文学の〈神話形成〉的傾向はいかに解釈できるのか。神話それ自体が文学のテーマではないなら、神話によって照し出そうとしてあるものとは何か。などといった大江の神話的思考の根底

にあるものを明らかにしていきたい。

（第一章 神話と〈神話形成〉）

蘇明仙は、実現されなかった出来事に焦点をあて、そこに可能性を見ようとするテクストとして大江健三郎の作品群を読み解こうとしている。実現された歴史に対抗する、もう一つの歴史。それは既存の歴史にもうひとつの虚構の歴史を対置して、新たな連合の関係を創り出すことを意味するだろう。そして、その連合的な歴史の創出を成り立たせているのが、〈神話形成〉という働きではないのか、という問いは鋭い。蘇明仙自身が指摘しているとおり、神話と歴史とは密接に結びついているからだ。

その問いをめぐって、この書では多角的な検討がなされている。一九六〇年代に起こった新しい日本ナシヨナリズムと〈神話形成〉との関係、出来事の反復（再現）や円環的時間認識と神話的時間間の関係、登場人物と記紀神話との関係、神話的思想と異化の関係等々、それぞれに説得力のある論が展開されている。特に『万延年のフットボール』、『芽むしり仔撃ち』と、『芽むしり仔撃ち』裁判）、『同時代ゲーム』における神話的要素の分析は緻密である。この書によって、大江健三郎の作品群における神話と歴



史という問題領域の広大さを知ることができるだろう。

ただし、最初に提示した「今日の文学においてなぜ神話なのか」という問題を本書が十分に論じきっているとはいえない部分が残っていると思う。例えば、大江健三郎の小説がその構成において神話的な時空間を立ち上げているとして、そのことと実現した、現実の世界の時空間とはどのような関係にあるのだろうか。また、自己言及によって生まれている永遠回帰の反復や、新しい「私」探求のテクストが、どれくらい既存の歴史を相対化しているのだろうか。このような点については、今後もっと追究していく必要があると思う。

その場合、重要になるのは、統合の問題ではないだろうか。一言に連合といっても自明のものとして実体的に存在しているのではない。リングやミカンがいかなる文脈においても強い連合関係にあるわけではないのだ。何かを語ろうとする、その度に連合の関係は生成するのであり、そのような意味においては、連合に枠組みをあたえているのは、統合の働きなのである。大江健三郎の〈神話形成〉の文学世界と歴史認識は、いかなる文脈において、どのような照応関係をもって、実現された歴史（とそれをささえる神話）とに対抗しうるのだろうか。今後の蘇明仙の動向に注目したい。

（二〇〇六年一月 花書院 一三七頁 一三八〇円＋税）

（筑紫女学園中学・高等学校教諭）